

SHONAN MAIL

2025.OCT/VOL.218



医療法人徳洲会
湘南鎌倉総合病院

〒247-8533
神奈川県鎌倉市岡本 1370-1
TEL: 0467-46-1717 (代表)
FAX: 0467-45-0190



SHONAN MAILのご意見・ご感想はこちら 

SHONAN MAIL 10月号 2025年9月24日 発刊 広報室

今月の表紙

人物 外傷センター部長 西田 匡宏医師
京緋色 (きょうひいろ)
鮮烈な赤である緋色は、奈良時代から使われていた人気の伝統色です。緋色の中でも京都で染められたものは純度が高くあざやかなことから特別に名付けられました。「江戸紫に京緋色」と言われるほど人々にもてはやされました。

まちがいさがしの答え

- ①コウモリの向き ②星の数 ③ペロペロキャンディの色 ④クモの足の長さ ⑤オバケの帽子のボンボン

外傷センター

24時間365日、いつでも外傷患者を受け入れる体制

外傷センターでは、搬送直後から「迅速な初期対応」が始まります。救命救急医がファーストタッチを担い、トリアージと初療を行い、その後は外傷医を中心に病院全体の診療科がバックアップする体制が整えられています。気道の確保や止血、循環動態の安定化などの処置が数分単位で進められ、重症外傷における早期治療の成否を左右します。当センターでは救急搬送件数の増加に伴い、同時に複数の重症患者を受け入れられるよう初療スペースを拡充しました。これにより、診断と処置を並行して行うことが可能となり、外傷治療の質を高めています。「断らない救急」という理念のもと、徹底した準備と組織力で対応にあたっています。

確かな手術で、生活を取り戻す

初期対応を経た患者は、必要に応じて速やかに手術室へと搬送されます。外傷センターには4つの専用手術室があり、切断四肢や開放骨折、血管損傷、神経損傷など多岐にわたる外傷手術が行われています。昨年だけでも2,600件を超える外傷手術が実施され、四肢の機能回復を主眼に置いた治療によって、多くの患者が社会復帰を果たしました。手術室は救命救急センターと直結しており、検査・診断から治療までの動線が短く設計されています。さらに専用のCTやMRIを備えることで、迅速かつ精密な診断が可能です。外傷整形外科医が初期から一貫して治療にあたり、再接合や複雑骨折への対応も行います。高精度の外科治療を支えるのは、24時間365日稼働するチーム医療と専用設備であり、重症外傷治療の拠点として重要な役割を担っています。

外科と内科の力を結集して、より安全な治療へ

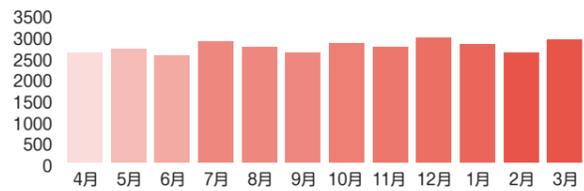
外傷患者は骨折や外傷そのものに加えて、糖尿病や高血圧、心疾患、呼吸器疾患などの基礎疾患を併せ持つケースが少なくありません。高齢化が進む現在、こうした内科的背景の把握と管理は外傷治療において欠かせない要素です。当センターでは、外傷外科医や救命救急医が内科医と緊密に連携し、外傷治療と並行して合併症対策を行っています。例えば大腿骨骨折の患者では、術前に心機能を評価して不整脈や心不全のリスクに備え、糖尿病患者では血糖コントロールを徹底することで創傷治癒を促進します。多発外傷や体幹外傷に対しては外科医を中心にチームを組み、内科的視点を加えることでより安全かつ確実な治療が可能となります。こうした体制は、単科の外傷病院ではなく、総合病院の中に外傷センターを設けることに大きな意義があり、幅広い診療科の力を結集することで、外傷患者の回復と生活再建を支えています。

Facts & Figures: Trauma Center

データでみる外傷センター

年間外来患者数 (2024年度・延べ)

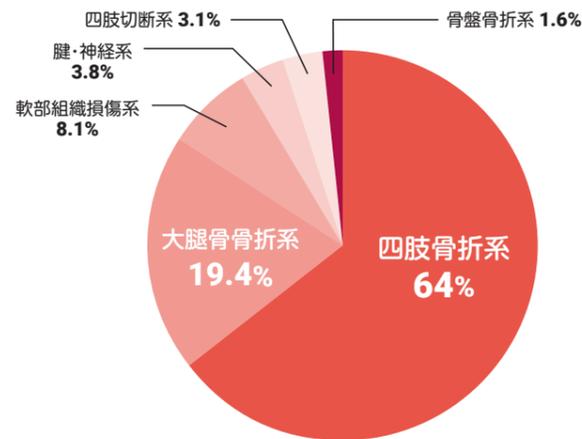
33,857人



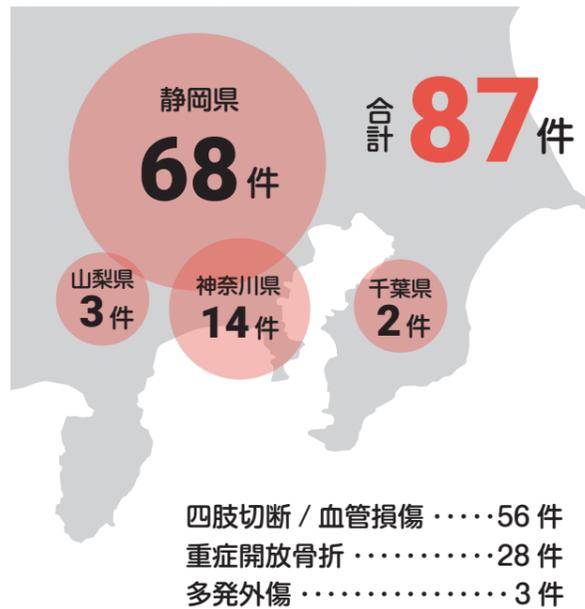
手術件数 (2024年度)

2,666件

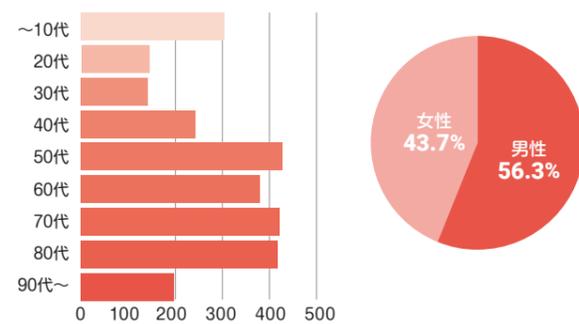
疾患別 (手術・2024年度)



ドクターヘリ出動元マップ (外傷件数・過去5年)



年齢・性別患者数 (手術・2024年度)



チームの連携フロー (救急搬送の場合)



外傷センターを支える人々

救命救急センター

山上 浩

YAMAGAMI HIROSHI

副院長
救命救急センター センター長



外傷患者を救う強い連携力

救命救急センターは、年齢や重症度を問わず、すべての救急患者さんを受け入れています。外傷診療では、まず救急医が初期診療を行い、入院や手術が必要と判断すれば、すぐに外傷センターの医師に引き継ぎます。外傷センターは、日常的な外傷から他院では対応が難しい手足の重度外傷まで、幅広く診療できるのが特徴です。国内でも手足の重度外傷を迅速に治療できるチームは限られており、遠方から搬送されることも少なくありません。搬送段階で緊急手術の可能性がある場合には、「30分以内に手術室へ」を合言葉に、医師・看護師・救命士が一丸となって初期対応にあたります。患者さんご家族に安心を届け、一人でも多くの命を救い、社会復帰につなげることが、私たちの使命です。

全身を診て、外傷のその先を支える

外傷の患者さんは、骨折や出血などの外科的な問題に加えて、糖尿病・高血圧・心臓病・腎臓病といった持病を持っていることが多くあります。総合診療科は、そうした背景を踏まえた全身管理と全人的なケアを担い、外傷治療を安全に進めるためのサポートを行っています。手術前には心臓やホルモンの働きをチェックし、手術中・手術後に合併症が起こらないようにリスクをできるだけ減らします。さらに退院後も、再発を防ぐための生活指導や持病のコントロールを行い、「命を救う医療」から「生活を守る医療」までを継続して支援しています。また、毎週、外傷整形外科医や救急医、多職種とカンファレンスを行い、チームで連携しながら患者さん一人ひとりに寄り添った医療を心がけています。



総合診療科
瀬戸 雅美
SETO MASAMI
総合診療科 部長

周術期センター

落合 亮一

OCHIAI RYOICHI

周術期センター センター長



安全な手術を支える、麻酔管理

外傷手術では、大量出血や呼吸・循環の変動など、予期せぬ事態が次々に起こり得ます。その中で、麻酔科医は患者の全身状態を守り抜く役割を担っています。気道を確保し、鎮静や鎮痛を調整しながら血圧や心拍、酸素状態を管理し、刻々と変わる状況に応じて最適な対応を行います。外傷手術は時間との戦いですが、そのスピードの裏には「安全」を守る麻酔科医の存在があります。術後には集中治療室と連携し、合併症の予防や痛みのコントロールも担当します。患者さんが安心して手術を受けられるよう支える麻酔科は、外傷医療に欠かせない縁の下力持ちです。

外傷手術の現場を支える看護の力

外傷医療の現場において、手術室看護師は医師やスタッフと連携し、治療が滞りなく進むよう多岐にわたる役割を担っています。迅速な準備や器械の受け渡し、術中の患者の全身状態の把握など、一つひとつの行動が治療の安全と円滑さに直結します。外傷手術は時間との闘いであり、限られた状況下で確実に動くことが求められます。そのため、手術室看護師は高度な知識と経験をもとに、チーム全体を支える調整役としても重要です。突然の事故で搬送される患者にとって、安心できる環境を提供することも看護師の大切な役割です。冷静な判断力と高度な技術、そして患者と家族に寄り添う姿勢が、外傷看護師に求められる力です。



看護部
瀬川 彩乃
SEGAWA AYANO
手術室看護師

リハビリテーション部

野田 玄

NODA GEN 係長

長塩 拓也

NAGASHIO TAKUYA 主任



再び歩み出す、その一歩を支える

外傷治療のゴールは、命を救うことではありません。患者が再び自分らしい生活を取り戻すこと、その未来を支えるのがリハビリスタッフです。理学療法士や作業療法士は、手術前から関わり、術後早期から機能回復に向けたトレーニングを開始します。筋力低下を防ぎ、日常生活動作を再獲得するために、一人ひとりに合ったプログラムを提案します。外傷は心にも大きな影響を与えるため、リハビリスタッフは励ましの言葉を添えながら、患者が「また歩ける」「また生活できる」という希望を持ってより寄り添います。救命から社会復帰までを支える外傷センターにおいて、リハビリは未来への橋渡しを担っています。

安心して治療できる環境づくり

外傷患者様ご家族にとって、急な入院は治療だけでなく経済的な不安も伴います。入院会計係は、医療費や保険制度の説明を丁寧に行い、手続きが支障なく進められるよう役割を担っています。ときには患者さんやご家族が理解しやすいように専門用語をかみくだき、不安が少しでも和らぐよう配慮しています。事務職として治療の現場には直接立ち会うことができませんが、患者さんが安心して治療に集中できる環境作りを心がけています。また、事務手続きの中で保険算定に関わる事も非常に多く、診療にあたる医師にも負担が係ることがないようスピード感をもち治療に専念できるよう全力で業務にあたっております。



医事課
宮脇 匠
MIYAWAKI TAKUMI
医事課入院係 係長

13名の医師に聞いてみた！
あなたにとって
外傷センターとは？

論

確かな手術手技に加え、理論と議論が要求される試行訓練の場。
(伊澤医師)

究

学術研究も行いながら、常に最善の治療法の探求を欠かさない姿勢。(佐藤慶治医師)

光

自分の人生にとって光であり、日本の未来の光であるから。(二村医師)

団

皆で困難な症例に挑む姿勢を持っているから。
(西沢医師)

和

多職種が調和・協力して診療にあたっているからです。
(小川医師)

礎

外傷医療の基盤であり、患者さんの回復を築く出発点だからです。(西田医師)

道

高みを目指して追い求め続ける道を探求する場であるから。(对比地医師)

挑

重症四肢外傷の専門施設として10年以上経過しましたが、いまだに過去に経験のない程の難しい症例が搬送されます。治療困難な外傷であっても、臆さず挑み続けられるチームでありたいと思います。(佐藤亮医師)

志

使命感を胸に、外傷医療に挑み続けているから。
(石橋医師)

改

日々、新たな知見が集積され、カンファレンスを通じて言語化され、治療方針が改まります(鈴木医師)

熱

外傷について日々熱く向き合い、熱く議論をしているから。
(勝久医師)

笑

「笑顔」で寄り添い、過酷な治療のその先で「笑顔」になってもらいたいから。(矢内医師)

塾

かつての緒方洪庵の適塾のように、外傷を学ぶために全国から人が集まり、正しい医療とは何か議論しています。(長谷川医師)

医師のご紹介



部長
西田 匡宏

・日本整形外科学会専門医・指導医
・臨床研修指導医



部長
二村 謙太郎

・日本整形外科学会専門医・指導医
・日本整形外傷学会評議員
・AOTrauma Japan 教育委員



医長
長谷川 真之

・日本整形外科学会専門医・指導医
・インфекションコントロールドクター (ICD)



医長
鈴木 崇史

・日本整形外科学会専門医・スポーツ医
・日本登山医学会
Diploma in Mountain Medicine



医長
对比地 加奈子

・日本整形外科学会専門医
・日本整形外傷学会評議員



医長
佐藤 亮

・日本整形外科学会専門医
・J-SWAT 所属



医長
小川 高志

・日本整形外科学会専門医・指導医
・日本手外科学会専門医
・AOTrauma Japan 教育委員



医長
伊澤 雄太

・日本整形外科学会専門医



医員
矢内 紘一郎

・日本整形外科学会専門医
・日本手外科学会専門医



医員
石橋 卓也

・日本整形外科学会専門医



医員
佐藤 慶治

・日本整形外科学会専門医



医員
西沢 剛

・日本整形外科学会専門医



医員
勝久 寛太

・日本整形外科学会専門医

受診について

■外来日

月曜日～金曜日

※紹介状と画像(レントゲン・CT・MRIなど)をご用意の上、事前にご予約をお願いいたします

■受診方法

予約制

■新規予約専用ダイヤル

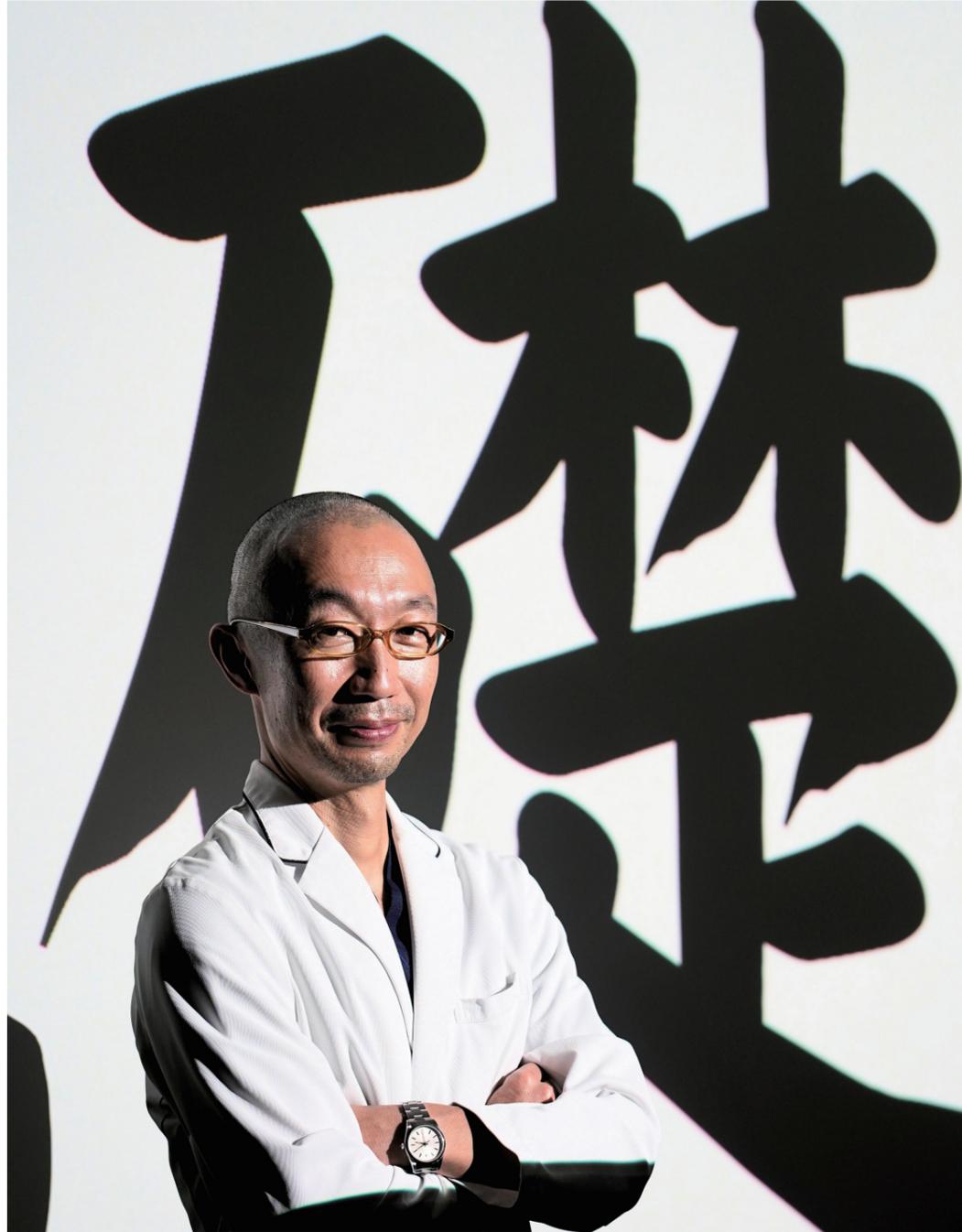
0467-84-8922

受付時間：月～金 13:00～16:30

■ご予約についての詳細はホームページでご確認ください

🔍 湘南鎌倉 予約





SPOTLIGHT

外傷センター部長 西田 匡宏

「自分のアイデンティティであり、人生の礎。それが“外傷センター”。」

医師を志した原点

僕が医師を目指したのは、子どもの頃の環境が大きく影響しています。喘息で聖路加国際病院に通っていたこと、そして母が同じ病院でソーシャルワーカーをしていたことです。母は患者さんと医師の間に立ち、時には医師同士の橋渡しまで担っていました。小さい頃からその姿を見ていたので、「人の命や生活を支える仕事」がとても身近なものでした。また、僕自身も喘息で医療者に支えられる経験をしていたので、「自分も医療の世界で人の役に立ちたい」と思うようになったのは、ごく自然なことでした。

漫画「カメレオン」のような人生

僕の人生を振り返ると、漫画『カメレオン』の主人公に似ていると思うことがあります。これはいわゆる不良漫画で矢沢栄作という主人公がいるんですが、彼は喧嘩が強いわけでも頭がいいわけでもなく、何の取り柄もないのに、なぜか幸運が重なってどんどん成功していく。僕自身も、まさにそんなふうな「運に助けられて」きました。中学校時代は、成績は下から数えたほうが早いぐらい。勉強が本当に苦手で、周囲の友人たちが理解しているのが不思議なくらいでした。ただ、真面目な仲間恵まれて、一緒に勉強しているうちに少しずつ成績が上がっていきました。予備校では、二浪・三浪している面白い仲間たちと出会い、遊びに流されそうになりながらも、ある時「このままではダメだ」と思い直しました。勉強に集中し始めると少しずつ成果が出てきましたが、医学部に届くほどではなかったです。センター試験では、国語が大の苦手で大きく点を落としてしまいました。その一方で理科は満点を取ることができ、その結果、大学の入試制度にも助けられてなんとか医学部に進むことができました。今振り返っても「運に助けられた」としか言いようがありません。山形大学に進学してからも、また仲間恵まれました。勉強会にはクラスで最も優秀な学生が加わってくれて、そのおかげでぐんぐん成績があがりました。結局、僕はいつも環境や人に恵まれ、助けられてきたのだと思います。山形大学に進学してからも、また仲間恵まれました。勉強会にはクラスで最も優秀な学生が加わってくれて、そのおかげでぐんぐん成績があがりました。結局、僕はいつも環境や人に恵まれ、助けられてきたのだと思います。

広尾病院での出会い

医師になって最初の大きな転機は、初期研修先の広尾病院でした。実は第一志望だった聖路加の試験に落ちてしまったんです。英語の問題が全く理解できず、「これはもう無理だな」と試験中に悟っ

たほどでした。広尾病院は三次救急を担っていて、日々、重症患者が運ばれてきます。そこで出会った整形外科の先輩は、最初の印象が最悪でした（笑）。とにかく厳しくて、「この人の下にはつきたくない」と本気で思ったくらいです。でも一緒に働いてみると、その姿勢に圧倒されました。患者さんに真剣に向き合い、術前計画を徹底して練る。最初は怖い存在でしたが、やがて「本物の医師とはこういう人なんだ」と心から尊敬するようになりました。その出会いが、僕を外傷整形外科へと進ませてくれたのです。

ドクターヘリでの決断

もう一つ、大きな転機がありました。埼玉医大・川越の救命救急センターに勤務していた頃、ちょうどドクターヘリが始まったばかりで、僕もフライトドクターとして現場に出勤することになったんです。ある日、工場で作業員が巨大な機械に挟まれたという要請がありました。現場に到着すると、消防や警察がすでに集まり、作業員2人の足はまだ機械に挟まれたまま。出血も酷く、タイムリミットが迫っていました。このままでは命が助からない。残された選択肢は「切断」しかありませんでした。若手だった僕に現場の指揮が任せられ、「本当に自分でいいのか」と迷いながらも、時間は待ってくれません。最小限の麻酔と輸血で処置を行い、現場で足を切断しました。あの時の緊張感や張り詰めた空気が今でも鮮明に覚えています。無事に2人の命は助けられたものの「本当にこれでよかったのか」と自問自答しました。しかし1～2か月くらい経過したあと、患者さんから「助けてくれてありがとう」と感謝の言葉をいただいたんです。そのときは胸の中の迷いがすっかり消えました。あの出来事こそが、外傷医療を一生の仕事にしようと思った瞬間でした。

恩師との出会い、そして湘南鎌倉へ

広尾病院での経験を経て、外傷整形外科の世界に進んだ僕は、2004年に群馬県の妙義グリーンホテルで開かれた整形外傷のセミナーで土田芳彦先生と出会いました。先生の発表は圧倒的で、誰も質問できないほどレベルが高く、「世の中にはこんな医師がいるのか」と衝撃を受けました。その後、何度かセミナーで顔を合わせるうちに「一緒にやらないか」と声をかけていただき、2014年から湘南鎌倉総合病院の外傷センターに加わりました。僕にとって外傷センターは「礎（いしずえ）」です。自分のアイデンティティそのものであり、すべての基盤となる場所なんです。

湘南鎌倉外傷センターという「礎」

ここは僕にとって、ただの職場ではありません。自分のアイデンティティそのもの。「礎」と呼ぶにふさわしい場所です。外傷医療というと、遊離皮弁や再接着のような特殊な手術が目立りますが、実際には日常的な骨折や外傷の治療が大部分を占めます。大切なのは「その人にとって一番良い治療を選ぶこと」。どんな症例でも「自分や家族だったらどうするか」という視点を大切にしています。そして若い医師にも「迷ったら家族に置き換えて考えてごらん」と伝えています。外傷センターの強みは、人と体制だと思います。専門の医師やスタッフが集まり、専用の手術室や集中治療の体制も整っている。だから、どんな重症患者が運ばれてきても「まず受け止められる」という安心感があります。これはとても大事なことです。患者さんやご家族が病院の扉を叩いたときに、「ここなら大丈夫だ」と言える体制がある。それが湘南鎌倉外傷センターの最大の強みだと感じています。

鎌倉での暮らし

7年前に鎌倉に引っ越してからは、地域でのつながりも大きな支えになっています。息子のサッカーチームを通じて父親仲間と知り合い、サッカーをしたり、駅伝に出たり、ボウリングを楽しんだり。ここでは「先生」ではなく「西田さん」と呼ばれ、職業を離れて付き合い合える仲間ができました。思いがけず新しい土地で素晴らしいコミュニティに恵まれ、幸せを感じています。そしてもう一つの楽しみはお酒。日本酒が特に好きで、1年前に日本酒セラーを購入し、美味しいお酒を嗜んでいます。仲間やお酒を楽しむ時間は大切なリフレッシュです。

幸せを感じながら

僕は仕事を「仕事」と思っていない。楽しくて、趣味のようなものです。だからこそ、嫌々働いている人を見ると「好きなことをやればいいのに」と思う一方で、自分が好きなことを仕事にできている幸せを強く感じます。不自由もありますが、大したことはありません。漫画『カメレオン』の矢沢栄作のように、努力以上にラッキーに助けられながら、ここまで来れました。そして今、僕は「自分より幸せな人はいない」と本気で思っています。これからもこの幸せに感謝しながら、外傷整形外科医として生き続けたいと思います。



フライトドクター時代の一枚。



父親仲間との時間も大切に。



自宅での一杯が、最高のリフレッシュ。



カメレオン 講談社 加瀬あつし（著）

No.22 携帯で認知症？ スマホ認知症について

近年スマートフォン（以下スマホと略す）の性能が向上し、多くの人が、様々な場面で使用することが増えています。しかし、使用過多になると「スマホ認知症」という状態になる可能性があることをご存知でしょうか？大人だけではなく、子どもや中高生にも広がっていて、テレビでも取り上げられるようになりました。では、スマホ認知症になったら、実際にどのような弊害がおこるのかをご説明します。

スマホ認知症とは…



長時間にわたるスマホの利用やスマホ依存による脳の疲労が原因で引き起こされる認知機能の障害のことを言います。

一般的な「認知症」と同様に認知機能の低下により日常生活に支障をきたす状態ですが、早目に対策を講じることで治ると言われています。しかし、**放置するとアルツハイマー型認知症や若年性認知症を発症する**可能性があります。そのため、**働く世代にとって大きな影響を与えることとなります。**

こんな症状が…

- ・記憶力・集中力低下
- ・想像力低下
- ・注意力散漫
- ・生活意欲低下
- ・言語障害
- ・体調不良
- ・遂行実行機能低下
- ・情緒不安定
- ・コミュニケーション能力低下

対策・改善策

- ・使用時間を決める（1～2時間程度）
- ・スマホの機能に頼らない、頼りすぎない
- ・睡眠の質を高める
- ・人との直接的なコミュニケーションを増やす
- ・脳を休ませる
- ・五感をバランスよく使う

やってみよう！スマホ認知症のチェックリスト



- | | |
|---------------------------------------------|----------------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 最近物忘れが増えた | <input type="checkbox"/> 空き時間や休憩はスマホを使用している |
| <input type="checkbox"/> いつも頭も身体も疲れている | <input type="checkbox"/> 自宅以外でもスマホを長時間使用している |
| <input type="checkbox"/> 何事にもやる気や興味がわかない | <input type="checkbox"/> スマホがないと日常が困る |
| <input type="checkbox"/> 不眠や頭痛、めまいなどの不調がある | <input type="checkbox"/> 覚える、覚えたいことはスマホで撮影する |
| <input type="checkbox"/> イライラしたり、気分の落ち込みがある | <input type="checkbox"/> 漢字が書けなくなった |
| <input type="checkbox"/> 集中できなくなった | <input type="checkbox"/> 物事や人の名前が思い出せなくなった |
| <input type="checkbox"/> 仕事や家事の段取りが悪くなった | <input type="checkbox"/> 就寝前にスマホを見ている |

あてはまる数が多いほど**高リスク**です。日々の生活習慣を見直して、スマホ使用時間を減らす対策を実践してみてください。



NEWS

リベリア共和国 ポアカイ大統領が当院を視察されました

2025年8月19日、リベリア共和国のジョセフ・ニューマ・ポアカイ大統領が、第9回アフリカ開発会議（TICAD9）出席に伴い、湘南鎌倉総合病院を視察されました。当院を運営する徳洲会グループはこれまで、リベリアに対して透析機器の寄贈や医療スタッフの研修などを行ってきており、2022年には同国初の透析センターが開設されています。こうした交流の成果を背景に、今回の視察が実現しました。ポアカイ大統領からは、これまでの支援に対する謝意とともに、徳洲会の理念「生命だけは平等だ」への深い共感が示され、さらに今後も人材育成を含めた継続的な支援への期待が寄せられました。当院は今後も、地域医療を担うとともに、国際的な医療協力にも取り組んでまいります。



中央左：ジョセフ・ニューマ・ポアカイ大統領
中央右：小林 修三院長

日本初！手術支援ロボット「ダビンチ 5」を用いた同種腎移植手術を実施しました

当院 腎臓病総合医療センター腎移植チームは、2025年8月26日、日本で初めて最新型手術支援ロボット「ダビンチ 5」を用いた同種腎移植手術を実施しました。「ダビンチ 5」は、従来機に比べて操作性や視認性が大きく向上しており、医師は鮮明な三次元立体視野を確保しながら、精密で繊細な動作を実現できます。これにより、従来の方法と比べて患者さんの身体的負担を軽減し、早期回復や合併症リスクの低減が期待されます。腎移植は高度な技術と多職種連携が必要とされる分野ですが、今回の成功はチーム医療の結晶でもあります。当院は今後も最先端の医療技術を積極的に導入し、患者さん一人ひとりにより安全で質の高い医療を提供してまいります。



ダビンチ 5 を使用した日本初となる同種腎移植手術の様子

ちがうのどーこた？

答えは裏表紙をチェック >>>

全部で5つまちがいがああるよ。どこがちがうか、探してみよう！

